
IS~一夏の反抗~

終那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS～一夏の反抗～

【Nコード】

N8629Y

【作者名】

終那

【あらすじ】

一夏改変モノ。色々、突っ込んでいくうちにえらい事になってしまったもの。これぞ、自重？ナニソレ、オイシイノ？です。

注意！

改変なんて邪道だ！や、○○なんざ、知るかポケエ！の方は、プロトタイプネクストにガチタンで討伐しに逝って下さい。

プロローグ（前書き）

初見となる私は、終那です。やってしまったが、後悔はない。極力、失踪しないように頑張ります。

プロローグです。短いです。駄文です。こんなんで、よろしければ読んでいって下さい。

プロローグ

これは、とある平行世界の物語。イレギュラーとなってしまった主人公は一体、どのような答えを導き出すのだろうか。それは、一体、どれほどの範囲に及ぶのか、どれだけのモノを犠牲にしていくなのか。見当が付かない。

しかし、人である以上、何かの代償無しに何かを得ることはできない。それが世界共通の理ならば、主人公は何を対価に何を得るのだろうか。

電脳虚数空間の奥底で、数多の因果律を管理する自我は、ただただ、見続ける。様々なイレギュラー要素の入り混じった、平行世界の行く末を。

GET READY?

プロローグ（後書き）

後書きと名ばかりの、懺悔部屋。

いつも、英語の使わなくなったノートに書いていた短編小説なのに、長編になったという罫。なんか、急にガクブルが、と・ま・ら・ない。

ああ、目の前に月輪が見えるのは、気のせいかな。神は言っている。ガチタンで戦え、と。

ガチタンでやったら、うp主の技量じゃ瞬殺ですな。ノーマルで、ギリッギリでしたから。

と言う訳で、これから月輪を相手にガチタンのハードで、キャッキヤウフフしてきます。それでは、ここらで失礼させていただきます。

人物設定集1（前書き）

前のやつの修正版。12月3日修正。

人物設定集1

本小説の、設定です。

・織斑一夏

この小説の主人公にして、最大の改変処置をした人物。作者自身、どうしてこうなった、と思う今日この頃。

誘拐事件の折、ハッター軍曹（後述）に助けられ遅れて救出に来た千冬と決別する。それに伴い、「織斑」から「霞」に苗字を変える。（番外編で書きます。）その後、ハッター軍曹の下でMARZに入るための訓練に明け暮れる。このときに、コルタナ（後述）と出会い、以降はパートナーとして共に任務や学園生活を送る。MARZには、12歳で入隊。最年少ながら、14歳で少尉に昇格。昇格と同時に対シヤドウ部隊「白虹騎士団」設立、初代騎士団長に就任。性格は、原作にあった甘さを抜かし、物事を客観的に見るような性格。千冬と束に対し、激しい嫌悪感を抱く以外は、大して変更無し。唐変木も健在。

専用機「テムジン707J」↓「テムジン747J Type a8」

・コルタナ

高性能AIで、一夏のパートナー。基本、Vクリスタルもしくは一夏のISが、彼女の居場所。勿論、ハッキングもできる。主な仕事は一夏のサポート。

コルタナはMARZが開発した、施設管理用AIのプロトタイプ。それが、最年少でMARZに入る一夏に、ハッター軍曹がテスト兼訓練課程終了記念に、プレゼントしたもの。一夏の下で、全てのテストやら実験が終了した後でも一夏というのは、単に彼女が言い出したため。

彼女から得られたデータを基に、施設管理用高性能AI「VRシリーズ」がMARZ支部で活動中。（出展・HALOシリーズ）

・織斑千冬

一夏に決別され、ドイツで教官を一年間やり、IS学園で教職という名の監視されている人。

自分のやってしまったことを、今更になって絶賛後悔中。しかし、どうすることもできずただ、教務に忙殺される日々。ある意味、作者の断罪対象者その1である。そんなに改変無し。

・ハッター軍曹

熱い人、兎に角熱い人。某テニスの熱い人を想像してくれればok。一夏誘拐事件で、一番速く一夏を救出し、その後一夏に特別訓練させた人。若干一夏が熱いのは、紛れもなくこいつせい。

MARZ東方支部の総司令官で、階級は准将なのだが、何故か、部下や一夏は軍曹と呼んでいる。というのも、軍曹のときにやらかしたため。部下や一夏にかなり慕われている。

実は、一夏と千冬の両親と面識があり、有事の際は子供達を頼むと言われていた。しかし、一夏と千冬が決別し離れ離れになったことで、彼は非常に頭を悩ませている。一応、一夏の後見人として書類に記述されている。

ISが発表される以前のパワードスーツ「アフアームド・ザ・ハッター」が、愛機。（出展・電腦戦記バーチャロンマーズ）

・ベルリオーズ

作者の中で、織斑父役をどうするか一番迷った人物。因みに、迷ったのはジョシユア・オブライエン。かっこいいよね、ジョシユア。織斑姉弟に両親がいないのは、両方ともKIA（戦死）のため。

記録では、MARZに所属しており、任務中に戦死となっている。

（出展・ARMORED CORE4）

・霞スミカ

作者の中で、千冬と口調が似ていると思われたため、織斑母役として登場。

ベルリオーズと同じく、KIA（戦死）となっている。

記録では、MARZ所属で新型パワードスーツのテスト中に、スーツが暴走しその鎮圧時に戦死。詳細は不明。（出展・ARMOR

ED CORE 4)

・クリアリア・バイアステン

マーズでお世話になった人も多いはず。別名、白騎士。

「白虹騎士団」の副団長で、一夏が学園に通っている3年間や任務でいないときのピンチヒッター。優秀だが、一夏信望者。

一夏からは、引かれているのに気づいてない。ある種の、鈍感。(
出展・電腦戦記バーチャロンマーズ)

組織及びテクノロジー設定集（前書き）

前のやつの修正版。12月3日修正。

組織及びテクノロジー設定集

この設定を軸に、本小説は成り立っていますのでよく注意して、お読みください。

テクノロジー編

・Vクリスタル

地球のとある遺跡にて発見された、クリスタル。8面結晶体で、遺跡にあるのは全長5メートルもある。一夏が所有しているクリスタルは、MARZが解析し独自に切り出したもの。ペンダントタイプ、として身に着けている。

クリスタルの作用で現在分かっているのは、精神干渉作用、空間転移作用、電子干渉作用の三つ。しかし、真の能力は「事象の転送」である。

・定位リバース・コンバート

早い話が、ワープ。ただし、人間サイズが限度。

・シャドウ

Vクリスタルの精神干渉作用により、人々の無意識が具現化し凶悪化したもの。ISによる女尊男卑の風潮が世界に広まってからは、出現数が軒並み増加。

組織編

・MARZ

特務機動部隊MARZが、正式名称。

設立目的は、対テロ、対紛争の即時鎮圧が目的で、今となっては専ら、警察機関の代わりとして機能している。まあ、設立当初からやっていることは、何にも変わっていない。

一夏が白虹騎士団を設立する前に、シャドウ討伐を行っていたのもMARZ。

東方支部総司令官・イッシー・ハッター准将

東方支部所属・霞一夏少尉

・白虹騎士団

一夏が設立した、対シャドウ用の部隊。選りすぐりの人材に、装備、そして資金。極めて特殊かつ異常なほどの、戦闘集団。

最新のパワードスーツを更に、個別にチューンした、「テムジンシリーズ」が正式採用されている。

騎士団長・霞一夏

副団長・クリアリア・バイアステン

（組織及びテクノロジーの出展・電脳戦記バーチャロンマーズ）

第一話 世界に一人…（前書き）

やっと、一話うp。さて、これから忙しくなるぞー！

第一話 世界に 一人：

「失礼します。霞一夏少尉、出頭しました。」

ビシッと正面を向いて敬礼。制服に似合わず、その顔立ちは少し幼い。

「よく来たな。だがっ！！楽にしている、ぞ！！これは少々プライベートな問題だ。」

「了解。言っておくけど、娘が最近云々は、聞かないからな。」

「ガッテーム！！！」

イッシー・ハッター准将。俺より階級が高く、東方支部の総司令官。なのにもかかわらず、なぜこうも出世できたのか、甚だ疑問だ。

「しかーし！！これは、一夏の問題についてなので置いておく。」

「俺の？」

心当たりが、多すぎる。ドイツ軍のあのチビとのいざこざは、どうにかして解決したし。白虹騎士団設立時の揉め事は、ハッター軍曹の口添えで解決したし。…、他に何かあったか？

「あるでしょう？ 非常事態だったとはいえ、開発中のISを起動させたのよ。忘れたの？」

「ああ、あれか。でもあれって、当局がどうにかするんじゃないの？」

「どうにかするから、私達がここに呼ばれたんでしょう。ですよね？」

全く、よくできたAIだ。彼女は、コルタナ。高性能AI、俺のパートナー、以上。

「当局は、世界で唯一のIS男子適格者として、世間に公表するつもりらしい。勿論、データも公表予定だ。」

「……、それって下手すれば、世界が変わる。」

「ああ。だから、一夏。上官命令として、霞一夏少尉にIS学園に出向し、ISについての基本事項を十分に訓練することを命じる。」

「は？」

つい、間拔けな声を出してしまった。ちょっと待て。俺がIS学園に行くのはわかった、が、その間の俺がやってる仕事はどうそん！？まさか、当局が人材を派遣するとか？いやいや、あそこがやるわきゃないだろう。いつも、何もしないくせに。

「一夏、言葉に出てるわ。」

「どっから？」

「ちよつと、のところから。」

「まあそれについてだが、当局に補充要員を要請した。これで、来なければそれまで。来たら、万々歳ってところか。」

「……、了解しました。駄目もとで、専用機は？せめてそれくらいあるでしょう？」

あると信じたい。

「あるぞ。MARZの開発した第四世代ISが。テムジン707Jが。この機体が、一夏の専用機として運用される。」

「まさかの、テムジン系か。」

扱いやすいんだろうな。武装もシンプルだから、俺は好きだ。なるほど、大体分かってきた。

「コルタナ、ISに関する情報収集、頼む。」

「そう言うと思って、既に収集済み。後で、目を通しておいて。」

「ということで、俺達はここで失礼させていただきます。」

ドア付近まで戻って、敬礼し部屋を出た。廊下を歩きつつ、これから為すべきことについて考えるのだった。

第一話 世界に 一人…（後書き）

懺悔部屋

前の設定集でミス発見。しかし、どうやっても、本文の修正ができない。どうすりゃいいの！？あれか、ブレオンでかーちゃん撃破か！？余計なもの、一切無しで！！…、普通に死ぬな、こりゃ。

とりあえず、ごめんなさい。いつか、普通に後書きになる日が来るのだろうか。

というわけで、ここらで失礼させていただきます。

第2話 部屋に 一人（前書き）

お前、テスト期間中に何やってんのとか、つつこみはいらないぜ！

第2話 部屋に 一人

廊下を歩きつつ、思うこと。要は、仕事のことなんだが。

「どうしたもんかねえ。」

「クリアリアに、任せればいいんじゃないかしら。」

「うえ。あいつにか？」

「そうよ。優秀でしょ、彼。」

「確かに。…、内面は兎も角。」

「ええ、…そうね。」

クリアリア・バイアステンは、あらゆる面で相当に優秀な、俺の部下だ。ただし、内面は、霞一夏信望者でちよいと、残念である。

「つー訳で、クリアリア・バイアステン中尉を白虹騎士団騎士団長代理を命ずる。頑張れや〜。」

「は？ 話が見えないのですが？」

「言っでなかったか？」

「言っでないわよ、一夏。」

「あちや、やらかした。ついでに書類整理もあるから、俺の執務室に来いよ。どうせ、手伝ってもらおうとしてたし。」

「了解しました。」

ちようどいい所にクリアリアがいたので、俺の騎士団長用の執務室に、一緒に行くことにした。因みに、何故、階級がごたまぜかというと、白虹騎士団には実力がトップクラスの人間が集められている。そうして集めていくうちに、今のような階級が下の者が上の者に、命令するという奇妙な構図ができたのだ。やったのは、俺だけだね。そうこうしている内に、執務室到着。うん、書類で雪崩が起きそうだ。

「え〜とな。俺がISを動かせるのはこの支部の共通認識だ。当局はそれを世界に公表するらしい。で、公表するからにはIS学園に行けとのお達しだ。俺が言っているのは、クリアリアに帰し団長業

務の代行をしてもらいたい、ということだ。」

「そういうことですか。なるほど、クリアリア・バイアステン中尉、了解しました。」

「まあ、俺がいない間でいいから。休みのときは、戻ってくるし。」

「フフ、学校生活、頑張ってください。騎士団長。」

「それを言うなや、副騎士団長。手伝えよ、ホレ。」

書類の山、一角を押し付ける。単純な嫌がらせでだ。少しはこれで大人しくなるだろう。俺も、書類の山に挑むとするか。果てしないが。

数時間後、何とか二人であの山々を片付けて私室にて、コルタナが調べた情報を見ていた。

何、この専門用語のオンパレード。或いは激戦区。残りの期間で、覚えきれるか？…いや、覚えなければなるまい。心が折れそうだ。

「思ってたんだが。」

「何？」

「この、イグニッション・ブースト、というもの。EN効率、悪くないか？」

「放出と圧縮の繰り返し、みたいなものだね。」

「ENのロスが多すぎる。それなら、圧縮から放出した方が、効率良いだろう。わざわざ手間を掛ける必要もない。」

「そもそも、ISのEN自体、容量が少ないものね。」

「EN管理したいなら、こんなことするな、という宣告なのだろうか。」

ふうむ、分かん。あの人の意図が。別に、分かりたくもないが。天才と凡人では、差がありすぎる、ということか。

「全く、誰がこんなに複雑に作ったのか。」

「一夏、……。」

「贖罪に痛みが伴うならば、それは甘んじて受け容れなければならぬ。それが例え、どんなことだったにしても。」

世界を変えた代償、それは一部の人間にとって多大なる喪失と同意

義であつた。誰も見向きもしなかつた罪に初めて人が眼を向けるとき、人は隠されていた真実を知る。

第2話 部屋に 一人（後書き）

懺悔部屋

今日は、特に無し。これから、クリアリアがどんどん変な方向に行く予定。ここら辺で失礼させて頂きます。

第3話 学園に一人…（前書き）

誤字修正12月11日

第3話 学園に 一人：

いつの間にか時は流れ流れて、入学式。思えば色々あった。今でこそMARZのマークのバッジとして、待機状態になっている「テムジン707J」の、データ収集が面倒だった。というか、あれは普通に死ぬ。コルタナがいなかったら、どうなっていたことか。…、アフアームド・ザ・ハッターと一騎打ちとか、マジ勘弁して下さい。死ぬから、ガチで。

っと、終わったらいいのでそそくさと、教室に移動。俺は見世物か。あちらこちらから、視線がキツイ。うっわ、こりゃ、精神がガリガリ削られていく。…、こんなんやっていけないのか、俺？なんつか、ノイローゼになるんじゃないか、これ。

「(フフ、大変になりそうね。)」

「(そう思うなら、助けてくれ。実体化できるだろうが。)」

「(私って、一応重要機密なのよ?)」

「(へえー、そりゃ初耳だ。でも、機密なのはVクリスタル内の基盤の方だろう? んじゃ、問題なし。)」

「(物はいいいよね。ばれても、知らないから。)」

Vクリスタルによる精神干渉の、ちょっとした応用での会話。慣れれば、俺やコルタナの見た映像をやり取りできたりする。ただし、かなり疲れる。

そんなこんなで、教室に到着し席に座る。ど真ん中ってないよな。いくら出席番号順でも、男女の区別くらいつけて頂きたい。こんなところで、男女平等やられても正直困るのだが。本当、どうにかしてるぜ、この世界は。

「織斑くん！ 織斑一夏くん！」

「ええ？ あ、はい。何ででしょうか？」

「ご、ごめんね。お、怒ってないよね？ い、今自己紹介で「あ」から始まって今「お」で織斑くん

の番なんです。じ、自己紹介してもらえるかな？」

「了解しました。それが、命令であるならば。」

「いいですか？絶対ですよ？約束ですよ？」

そしてこの低姿勢である。この人、教師か？…その、えと、体格的に。

「了解しました。それと、そう易々と約束するものではないですよ。特に、できない約束はね。」

「え？」

椅子から立ち上がり、周囲を見渡す。一度、深呼吸をし気分を落ち着かせる。何事も最初が肝心、だからな。

「俺は、MARZ東方支部所属、白虹騎士団団長、霞一夏少尉だ。好きなものは、大してない。嫌いなものは、逃げることしかない者、向き合うことをしない者、無責任な者、だ。それと先に言っておく。次に俺を「織斑」なんて言った奴は、スプライナーの錆にしてくれる。」

その後席に座ろうとしたが、強烈なプレッシャーを感じ、横にずれる。誰だと思いい顔を向けると、俺の一番嫌いな人物の一人がいた。

「織斑、殺気を仕舞え。」

「失礼ですが、入学書類には確かに「霞一夏」と書いていたはずですが？」

「しかし、お前は…」

「霞です。どこの誰がやったのか知りませんが、俺は霞です。」

お忘れなきよう。」

それからようやく席に座り、クラスの女子がぎゃいぎゃい騒いでる中、授業の予習をしていた。こうでもしないと、授業に着いていけないからな。時間があるうちにやってしまはないと。

一時間目の授業は、まあ順調だった。少し校則違反だが、テムジン707Jのディスプレイを左目に展開させ、分からない単語やシステムをコルタナを介して解説を引っ張り出していた。見る人が見れば、一発でばれるが、下を向きノートや教科書を盾代わりとしてい

たため、事なきを得た。これは、いい抜け道だ。

そして、休み時間。

「おい。」

「んあ？何か用か？」

「ちよつといいか？」

「ああ。」

「廊下でいいか？」

「行こう。」

幼馴染に連れられて、廊下に。つか、不特定多数の女子、話したいならそっちから来いよ。俺にはただ、ドン引きしてる様にしか見えないんだが。

閑話休題。

「・・・・・・・・。」

「用がないなら、俺は戻るが？」

「何故？」

「その問いは、回答が多すぎて俺には理解できないが。」

「この六年間、何があったんだ？何故、一夏は変わった!？」

「俺が変わらないと、本気で思ってたのか？そいつは感動的だが、無意味だな。人は誰しも変わる。変わらないものなど、どこにもないさ。箒。」

俺は呆然としている箒を尻目に、一足先に教室に戻り授業の準備を進めた。この時も、ディスプレイを展開していた。

「(良かったの？アレで?)」

「(良くはないだろうが、態々言う必要もないだろう。)」

「(でも、一番の被害者よ。彼女。)」

「(一番場はないさ。ミサイルが落ちてそれに巻き込まれた奴らが、時系列的にも精神的にも、一番の被害者さ。それ以外は、二番以下だ。)」

「(まあ、確かにね。)」

「(なまじ優秀な姉を持ちちまうと、下もそうだと、人々は勝手に

思い込み拳句、押し付けようとするからな。」
俺が、そうであつたように。いいよな、天才は。何にも努力しなくても、何でも出来て。俺にはとても、そんな芸当できない。
少年は、憎悪する。この世界を変えたある人物たちを。しかし、その事実はまだ誰も気づいてはいなかった。

I S 及び追加設定集（前書き）

誤字修正12月26日

IS及び追加設定集

・IS「テムジン707J」

霞一夏の専用機。中近距離戦の高速戦闘に特化した機体。全身装甲で、MARZの技術を結集させた第4世代ISの完成版。

武装は、ビームソードとビームライフルが一体となった、スライプナーとパワーボムのみ。これだけの装備でも、十分戦えるのは、偏に一夏の実力あってこそのも。

単一能力「因果制御」

因果制御は、Vクリスタルの本来の能力である「事象の転移」を利用した能力。どんな絶望的状況下でも、発動すれば戦局が一気にひっくり返ることが可能。ただし、零落白夜以上の燃費の悪さに加え、一夏自身、最後の手段として普段は自重している。

装甲に、Vアーマーを用いているので、ビーム系に対し圧倒的なアドバンテージを有している。

・Vアーマー

某ガンダムのPS装甲のビームVER.もしくは、AC4系のPAのレーザーVER.欠点として、物理攻撃を受けるとVアーマーが消える。これは、パワードスーツも同様で、MARZ製のものには標準装備。

・Vコンバーター

人工的なVクリスタルの、劣化模造品。これとVディスクがあつて始めて、パワードスーツやISが実体化できる。早い話、ゲームのハードウェア。

・Vディスク

Vクリスタルを細かく粉碎し、巨大ディスクに均一に塗ったもの。このディスクに書き込まれたデータをVコンバーターで再現することにより、実体化できるようになる。要は、ゲームソフトと一緒の感覚。

・Vポジティブ

Vクリスタルによる電子干渉作用と精神干渉作用にどこまで耐えられるかを、ランクにしたもの。E，D，C，B，B＋，A，A＋，AA，S，S＋，SSとランク分けされ、＋とはAではないがAAでは少し違うというようなもの。E～Cが粗製で、どうにかこうにかパワードスーツ「ライデン」「VOX」「バル」系が動かせる程度の適性。B～A＋が最適な適性でMARZが一番に欲してる人材。パワードスーツ「アフアームド」「マイザーデルタ」「テムジン」系が苦もなく動かせる程度の適性。AA～SSは最早人外の適性者で、パワードスーツ「テムジン747系」「スペシネフ」「フェイ・イエン」「エンジェラン」といった強力かつ癖の強いパワードスーツを平気で乗りこなす。

ただし、適性が高いとそれだけシャドウになりやすい。

霞一夏、ランクSS

イッシー・ハッター ランクA

クリアリア・バイアステン ランクS＋

なお、白虹騎士団団員の平均ランクはSである。

・フレッシュ・リフォー

MARZのシャドウ研究所が、シャドウ汚染患者兼MARZ所属のパイロットのような医療プラントとしての施設。ある程度ならば、シャドウ汚染患者の治療ができ、高い水準の医療環境を提供しているプラント。民間の患者も受け容れていることから、世俗的認知度は高い。MARZの資金の一部はここから出ているといっても過言ではないくらい、人気の高さ。実は、イケメン目当ての奥様方が多いとか。所長は、リリン・プラジナー。

・リリン・プラジナー

わずか12歳で、研究所所長に登り詰めた天才少女。一夏の親友で、一夏を実験台に新薬のテストをしているとかしてないとか。腕はいいが、世間知らずで、一夏の頭痛の種。

（この章の全設定 出展；電腦戦記バーチャロンマーズ）

第4話 断頭台への行進・起（前書き）

いつの間にか、この小説のアクセス数が10000件を超えていた件について。

な、何すればいいんだろうか。本気で悩む今日この頃。

第4話 断頭台への行進・起

それで何事もなく授業は進み、俺は退屈していた。そもそも、MARZに入るに辺り、それ相応の学力が求められる。それ故、俺は訓練と平行して、一応大学レベルまでの学力はある。従って、高校でやるような勉強は俺にとって簡単なのだ。だが、ISの授業は面白い。山田先生という合法ロリがいるから結構、楽しんでるけどな。

「（恐るべし、合法ロリ。）」

「（いつからロリコンになったのかしら？一夏？）」

「（いや、俺はロリコンじゃない。断じて。ただ、眼福だ、と思っただけ。）」

「（男の子だものね。）」

「（…、写真を売り捌いたら、儲かるだろうか…）」

「（やめなさい。本人の名誉のために。）」

まあ、MARZってかなり給料が良いから、金に困ってないんだが。しかし、俺が男だといい加減認識してもらいたいものである。いくら、女性にしか分からない単語出てきたぞ。

そして、いつもの如く休み時間。

「ちょっと、よろしくて？」

「…、イギリス代表候補生セシリア・オルコットか。何の用だ？生憎、手が離せん。手短に頼む。」

うわっ、女性至上主義者が来た。このプライドの塊みたいなものと、一緒にいたくねー。

「な、何を…！まあ、私のことを知っていらっしやたようなので、見逃して差し上げますわ。入試のとき教官を倒したエリートですが、泣いて頼むなら、教えてあげてもよくってよ？」

「よし、コルタナ。この、馬鹿自慢女が倒したらしい教師のデータ、見せてくれ。どうせ、たいしたことはないと思うが。」

「待って、…。出たわ。IS学園では、実力は中の下ね。入試時の

ISは打鉄。遠くから弾幕を張れば、勝てない相手じゃない。」

「だ、そうだ。俺に自慢したいなら、世界最強に一騎打ちで勝つか、一ヶ月で大検とるなりしてみろ。それと、俺にはコルタナというアスタより優秀なAIがいるから、別にいいわ。」

「な、なんですか！？それは！！」

「何だっぺいいだろう？つか、時間だぜ？」

「時間ですって！？何w」さっさと席に着かんか、馬鹿者。」
「ッ！！」

バコンッ！！

今、出席簿らしからぬ音がしたし、頭蓋骨から変な音が聞こえたんだが。体罰って、今時期ご法度じゃないのか？知ってんのかな、いや、知れねーなこれは。

「ッッ！！いい！？逃げないことよ！！よくって！？」

「逃げられない上に、よくもねーよこの馬鹿自慢女。」

セシリア・オルコットは席に戻り、われらが暴君、織斑千冬によるパーフェクトIS授業が始まった。ISの各種武装の説明だが、ぶっちゃけ、俺には関係なかったり。

理由は簡単。俺のISには、追加装備が開発されてないのだ。ついでに言うと、単一能力を発現させる為に、アンロックはおろかウィングスラストも無い。勿論、バスの大半をそれに回しているんで、余計に容量が無くなった。まあ、乗りこなせるのが俺だけだった、っていうのも拍車を掛ける要因なのだが。それでも、パワードスーツにボコ半にされた俺だけでも。

「そういえば、クラス代表を決めなければな。」

面倒臭そうだな。やりたく、ねえな。ここでも、要職とか勘弁してほしい。というわけで、冗談でも言って回避しよう。面倒は嫌いだからな。

「先生。」

「どうした霞？」

「俺、クラス代表なんか、やりたくありません。」

「なんですって!？」

お前は食らいつくな!話がややこしくなるでしょうがっ!黙れ、S
hit up!!

「今、何とおっしゃいました?クラス代表なんか?貴方、世界で唯一の男性適合者だからといって、調子に乗らないでいただけるかしら?」

「(コルタナ。)」

「(OK、分かってる。)」

「私は、こんな文化的に後進した島国にサーカスしに来たのではございませぬ。それに、意味も分からないような極東の猿と、一緒にしてもらっては困ります。」

「成程。随分、偉そうだな。ふ、うらやましいよ。」

完全に、ブチ切れてます。クラスの皆、すまん。殺気が抑えられそうにもない。

「身の程知らずも、いい加減にしろよ?小娘。誰に向かって、そんな口を利いているのか、その足りない頭で考えたらどうだ?今の、貴様の発言は、IS開発国である日本を俺の所属する特務機動隊MARZを、そしてイギリスの品位をすら、貶めたんだ。」

「ついでに言うなら、今の貴方の発言はイギリスが言ったことと、同意義になるのよ。」

見る見るうちに、顔が青くなっていく馬鹿一人。自分の失言によろやく気づいたか。でも、もう遅い。思ったんだが、代表候補生って一体どんな基準で選ばれるんだ?強さか?それとも、ISとの適合率か?どちらにしろ、死に腐れ。

「どうする?ちゃんと、ボイスレコーダーに撮ってあるんだが?」
バダンッ!

「ちよっ、衛生兵ー!衛生兵ー!」

第4話 断頭台への行進・起（後書き）

後書き

ベ「大丈夫か？」

（返事が無い。ただの屍のようだ。）

霞「さっさと起きろ。また、やらせるぞ？」

「！！！！い、いやー、起きましたよ！？起きました！！

ベ「何をやらせたんだ？」

霞「たいしたことじゃない。プロトタイプネクストを2体同時に、相手にさせたただけだ。ブレオンで。」

ベ「（我が妻ながら、恐ろしいことをする。）」

霞「勿論、月光だな。」

ベ「頑張ったな。うp主。」

し、死ぬかと思ったよ。まじで。しかも、片方はジョシユアとかマジキチ。

ベ「それはおいといて、予告だ。」

かすみ「ああ。次回、一夏に、とある情報が耳に入る。激昂する一夏、その情報とは？次回第5話 断頭台への行進・承 お楽しみに。」

第5話 断頭台への行進・承（前書き）

誤字修正12月17日

第5話 断頭台への行進・承

「…、まあ、よくもまあ抜けぬけとあんなことを言えたものだ。正直、あれが代表候補の言うことか？」

「……。」

「もう少し、まともな感性を持ったものがいなかったのか？ 同情に値するよ。さて、先生、授業に戻りましょう。こんなことに時間をとっている場合ではないでしょう？」

この数時間で分かったこと。兎に角、人間としてのレベルが低い。立っている足場が高すぎて、自分の足元が見えてない。代表候補生、こんなことだと、高が知れるな。普通、自分の発言の影響力なんて気にしないし、する必要もない。だが、代表候補生となると、話は別だ。このようなクラスのなかでさえ、代表候補生ともなると自分の発言が、そのまま自国の発言に取られることもあると、何故理解しない。まあ、それで困るのは俺じゃないから良いけどな。しかし、良かったんじゃないのか？ 代表候補、その影響を身を以って教えたんだからな。

「（先が思いやられるな。）」

「（この調子じゃねえ。）」

「（今頃支部内は、戦闘態勢でも取ってんじゃねえの？）」

「（一夏が、私に情報を流させたからでしょう。それにしても、その確信犯的愉快犯な性格、どうにかならない？）」

「（…、善処はするさ。）」

そして、授業は滞りなく進み、俺は、必死にノートを取っていた。視界の隅に、何やら山田先生までノートを取っていたのを見たが。何が、取る程のものか？ これ？ だって、教科書に載っていることだけをただ、つらつらと言ってるだけだぜ？ 取る必要、全く以ってないと思うんだけどな。もうちょい、教科書に書いてないこととか、ここだけの話とか、色々あるでしょうに。…、俺としては、織斑先

生にそんな器用なことやってのけるなんて、思っちゃいないがな。むしろ、ここまでの恐慌政治とスパルタ教育に脱落者が出なかったことに、俺は引いてるよ。

そして、昼休み。

やつほーい！！飯だ！飯だ！IS学園って、食堂にも金掛けてあるらしいから、うまいらしいんだよね。これは、期待大、だな。早速、食堂へGO…？

ボタンッ！

「ハアハア、貴方よくも…。決闘ですわ！！その、減らず口、叩きのめして差し上げますわ！！」

馬鹿自慢女が、何やら厄介ごとを、持ってきやがった。しかも、決闘だと？ふざけた真似を…！

「言っておくがな、俺は面倒が嫌いなんだ。そんなにやりたいのなら、よそでやれ。」

「あら？負けるのが、そんなに怖いのですの？」

こいつ、言わせておけば…！！決めた。こいつは、ぶちのめす。完膚なきまでに、叩きのめす。

「良いだろう。吠え面かくなよ？」

「決まったな。1週間後、第3アリーナで霞対オルコットの模擬戦を行う。両名とも、準備を怠らないように。」

「はい。負けたら、私の小間使い、いえ、奴隷になってもらいますから。」

「了解。世界人権宣言も知らないのか？ツフ、ざまあ無いな。」

片や、顔を真っ赤にして怒る少女。片や、涼しい顔で挑発し続ける少年。

勝敗は、もう、決まっていたりする。南無。

それから、食堂で昼飯食って、授業。さして面白くもなんとも無いので、容赦なくカット。つーわけで、放課後。

「ふいー、……、やり過ぎたか？」

「やり過ぎよ、十分に。」

「反省はしている。やり過ぎた。しかし、こんな所で働いているとは。」

「事実上の、監視ね。それに、自分の弟まで人質に取られているようなものだもの。」

「俺は、あいつとは何の係わり合いも無い。赤の他人だ。」

俺は、ノートや教科書を片付けながら、コルタナと話していた。主に、オルコットとのいざこざについて。自分でも、やり過ぎた、という自覚はある。どうも、俺はプライドの高い奴と、馬が合わないらしい。頭に来るんだよね、プライドの高い奴相手にしていると。

「あ、織」（ギロッ）「ひい、か、霞君！まだいたんですね。良かったー。」

「何か用でも？」

「はい。部屋割りのことですが…。」

「1週間ほど、支部から通えと聞きましたが。」

「それが、急遽変更になって、寮に入るになりました。」

「勿論、一人部屋ですよね？」

「いや、あの、そのお、…」

OK、分かった。女子と相部屋か……。

「非常識にも程があるだろうがー！！恋人でも、ましてや夫婦でもないのに一緒の部屋って、どういう了見してんだー！！一番やつたら、駄目だろがー！！！！」

怒髪天を突く、まさにこのことかしら。当然よね。IS学園の寮制が相部屋方式を採用しているのは知っていたけど、男性にも適用して、一体何させたいわけ？まあ、一夏のことだから定位置リバー・コンバートで支部から通うのでしょうか。

アンケート（前書き）

ファイルは持ってきたのになしてこうなるかなあ？

アンケート

霞「今日は本編でもなく、また番外編でもない。で、うp主さっさとしろ。」

はい……。えー、このたびIS（一夏の反抗）ご覧の皆様、うp主さんと終那がプロットを書いたノートを学校に置き忘れるという失態を犯しました。なので、月曜日まで本編はおろか、番外編までも投稿することが出来ません。楽しみにしてください。暇つぶし程度に見てくださる人、本当に申し訳ありません。

霞「ああ。本当にな。貴様、分かっているのだろうか？」

し、仕方ないじゃん！！学校しかプロット書く時間無いんだからさ。

霞「……、言い残すことは、それだけか？」

へ？

霞「さて、シミュレーターに逝くぞ。加減はしてやる。相手は、レイヴンだ。ただし、ラストレイヴンに登場した全レイヴンだがな。」

どこが、加減したんだー！！！！丸つきり、死亡フラグでねえかあああ！！！！！！

霞「易しいだろう？ベルリオーズ、後は頼む。」

ガシッ、ズルズル

ベ「……、行ってしまったか。それよりも、これを読めば良いのか。」

ベ「本編での最初の脱落者、篠之乃箒にパスワードスツ何乗せるか、だそうだ。MARZに入れることは、確定らしい。」

1、テムジン系列（例；ファイアフライ）

2、フェイ・イエン（例；ヴィヴィット・ハート）

3、エンジェラン（例；アイスドール）

項目は増えても良いし、兎に角バーチャロンの機体なら何でも良い。なかなかうp主じゃ決められないから、皆様の意見を参考にしたいそう。まあ、こんなところか。意見・感想・うp主への叱咤激励

等々、随時受付中だ。それでは、この辺りで失礼する。」
ぎゃああああー！、こっちくんないー！！！！2対1とか、卑
怯だー！！！！もうやめて！うp主のヒットポイントは0よ！！
…、ズベン貴様まじねえわ。

第6話 断頭台への行進・転（前書き）

誤字修正12月22日

第6話 断頭台への行進・転

あれから一悶着あり、結局、定位リバース・コンバートを利用してIS学園と支部を行き来することになった。当然といえば、当然の結果だ。つか政府、ちゃんと真面目に仕事してください。お願いします。

「ということがあったんだ。信じられつかよ。あーああ、やってらんね。」

「しかしよう、女の子、よりどりみどりなんだろう？」

「女子と書いて変態と読む奴なら、たくさんいたが？」

「…。」

うん、やっぱり支部のおばちゃんの食事が一番だ。お袋の味って感じで美味しい。IS学園も中々捨て難いが、俺個人としてはこっちの方が好きだ。長年、食べなれているせいだろうか。因みに今日は、ハヤシライスにサラダorスープそれとデザート。IS学園みたいを選択方式じゃないが、その分、選ぶ手間が省けるから結構助かる。

「イ、イメージが…。」

「脆くも崩れ去ったな。」

「Oh, my god…」

「Amen」

「それより、イチカ。お前、またやったのか？懲りないな。」

「見てたのか。」

「ああ、そうともさ。イチカ、お前の行動や言動はガチで両親にそっくりだ。おかげで、寿命が何年縮まったか。」

父；ベルリオーズ、母；霞スミカ。それが、俺の両親。KIA認定されたし、記憶にもほとんど残ってないけど。

「そいつは良かった。」

「良くねえーわ！！」

ゴチンツ。

脳天直撃なんて、しなくても良かったじゃないが。あー、痛。その怪力を、もっと別のところで発揮しろっつ。何故、俺限定なんだ。理解出来ん。

「それはそうと、イチカ、ビックニュースだぜ。」

「イテテ、…。ビックニュースう？何が？」

「それがな…。」

「月にもVクリスタルが発見された。」

「って！！ハッター軍曹！？いきなり、自分の台詞を取らないでください。」

「おう、Sorry. ここ、いいか？」

「はい。どうぞどうぞ。」

ハッター軍曹、基、ハッター准将が空いている席に座る。トレイには大盛りのハヤシライスが。よく、食いきれるよな。

「それって、本物なんですか？なら、どこの所有・管轄になるんです？」

地球以外にもVクリスタルあったなんて、想像してなかったわけじゃないが。地球のアフリカにある、Vクリスタル（通称；アースクリスタル）

は、MARZの管轄だ。警備及び周辺地域の封鎖も行っている。それだけ、アースクリスタルの影響が強い、ということだ。それじゃなくても、周辺地域ではシャドウの出現率が、高い。これも、封鎖の原因のひとつでもある。

最大の理由。それが、環境の劇的な変化だ。アフリカは現在、アースクリスタルの影響で周辺地域の環境は乱れに乱れ、人が住めなくなってしまう。幸い、パワードスーツを着込むことで辛うじて、活動可能になってはいるが。それでも、Vポジティブの適性の問題で、多いわけじゃない。

Vポジティブ。パワードスーツを動かす為の、必要な適性。低いと動かせないし、高いとシャドウになる確率が高まる。シャドウになっってしまったら最悪、自我崩壊し廃人になる危険性がある。MAR

Z常識として、ランクB→ランクA十くらいが、丁度良いとされている。俺はランクSSだけど。

「世界の中でも、宇宙まで行ける技術を持っているのは、MARZだけだ。それに、Vクリスタルの管理や運用はMARZの権限でしか許可が下りていない。」

「ってことは、つまり…。」

「月のVクリスタル、ムーンクリスタルの管轄はMARZがやることになっている。」

「ただでさえ、Vポジティブの高い奴なんてそうそういないのにな。」

「「「仕事が増えるわけか…。」」」

俺たち、下士官トリオは揃って、ため息を吐く。ああ、当局も事務員採用試験でもやってくんないかな。

「まあ、心配Nothing! まだ、あると分かっただけですぐに人員を派遣なんてしないさ。そもそも、駐屯基地すらまだなんだ。」

「ですよ。…、少なくとも、まだ、ゆっくりしてられるな。」

「というか、イチカの場合、どうするんだ?」

「このままIS学園じゃねえ?」

「それが有力か。」

「俺は向こう3年間、学校だから、頑張れや」

それから、駄弁ってた。主にハッター准将の親ばかり話に「リア充死ね! もげろ! 吹き飛ばせ!」と俺達三人で、支部内の非リア充代表としてリア充をボコってた。無論、ハッター准将に返り討ちに遭ったが。ハッター准将、マジ強い。

所変わり、支部内訓練場。

「(来い、テムジン707J) …、さてと、ちよいと付き合ってくれ。」

「うい。5分で良いか?」

「おう。」

「両者、始め!」

「GET READY!!」

テムジン707JとあふぁーむどTTが同時に動き出し、次々と攻撃しては避けるを繰り返していく。その様子を、電脳虚数空間の奥深くから、見ているのがいた。

＜因果律が交じり合い、特異転となってしまった哀れな子。どうか、無事で…。＞

第7話 断頭台への行進・結（前書き）

誤字修正12月26日

第7話 断頭台への行進・結

あの模擬戦、実はISとパワードスーツの戦闘だったりする。細かいことはおいといて、約束の1週間後。第三アリーナにて。

「一夏、大丈夫なのだろうな？」

「勿論。コルタナもいればテムジンも俺にはある。あの酔っ払いに負けるほど弱くは無いつもりさ、箒。」

「そ、そうか。な、な、ならいい。さっさと行ってこんか！」

「そうだぞ、霞。さっさと始めてしまえ。」

「YES」

ピットの方に悠々と歩きながら、テムジンを展開していく。ピットに着いたと同時に、最終チェック。

「一夏、全システムチェック完了。エネルギー異常なし。Vアーマ1、Vコンバーター、共に異常なし。戦闘モード起動させるわ。」

「了解。コルタナ、サポート任せる。∴、霞一夏、テムジン707 J、出撃する！！」

ピットから出て、宙を舞う。全身装甲で、他のISに比べると少々大きく、右手には巨大なランチャーがその存在感を放っていた。

「よく、逃げずに来ましたわね。褒めて差し上げてよ。∴、etc」
ターゲット確認。排除開始。

「敵機撃破で、Go ahead！！」

馬鹿自慢女が何か言っていたが、問答無用でスライプナーのニュートラランチャー出力80%を、ぶっ放した。何か言っている間は攻撃されない、とも思っていたらしい。俺は、そんなに甘っころくない。

「他の奴らと同じだとも、思っていたのか？」

「つく。踊りなさい！私、セシリア・オルコットとブルーティアーズの舞踊曲で！！」

「オールレンジ攻撃か。成程、厄介だ。」

つく、開幕と同時に攻撃なんて、一体どんな神経しておりますの！
？しかも、シールドエネルギーの三分の一を持っていくほどの威力
なんて、私、聞いていませんわ。狙撃しようにも、相手がこうも動
き回られるとなかなか狙いが点けられませんし、こうなったらブル
ーティアーズで…。

やっと、真打の登場か。存外、速かったな。しかし、BT兵器は6
機じゃなかったか？まあ、邪魔立てするなら容赦はしないけどな。

「コルタナ、ビットの機動予測頼む！」

「了解！こちは任せて！」

「……っ！！どうして！どうして！？中りませんの！？」

「機動さえ読めれば、これくらい造作も無い。貴様では、所詮役不
足、ということさ。」

「死角に入り込み、反応が遅れそうなところからの攻撃。よく考え
たじゃない、貴女にしては。でも、BT兵器を使用中は貴女の動き
も停まるみたいね。」

「見戲だな、貴様。まるで、よちよち歩きだ。」

BT兵器の制御が乱れた。この程度の挑発に乗るとは、やはり俺達
の敵ではなかったな。もう少し、骨がある奴だと思ったんだが、見
当外れだったらしい。さっさと、この茶番を終わらせるか。俺は、
スラスターを最大戦速にし、接近戦を仕掛けようとした。

さっきから、役不足だの、何だのかんだの色々言ってくれますわね
え。許しませんわよ！こうなったら、意地でも勝って奴隷としてこ
き使ってやりますわ！！

「この距離なら…！！」

「掛かりましたわね。」

「何！？」

「ブルーティアーズは6機あってよ！！」

「ミサイル型！？駄目！避けられない！！」

「っち。なら、これでどうだ！！」

ミサイル型に、パワーボムをぶつけて二つとも、誘爆させる。爆風

により、一時的に視界が制限されるが、それは向こうとて同じこと。
「コルタナ、熱感知レーダーに切り替え。EN残量117か。問題無い。」

「どうするの？」

「MARZ戦闘教義指導要綱第13番 一撃必殺。」

スライプナーにENを供給し、爆風により出来た煙幕の中に突っ込む。ブルーティアーズも迎撃するが、ビーム類に比類なき強さを発揮するVアーマーの前には無力であった。

「っはああ！！…、ちよろいもんだな、イギリス代表候補生は。」

「これで、代表候補生とは笑わせてくれるわね。」

…、珍しくコルタナが不機嫌だ。まあ、気持ちは分からんでもないが。肩書きに比べ、実力不足なめんが、終始見受けられたからか。イギリスも存外、ISを十全に動かすことのできる人材に、四苦八苦していて、あらゆる面で役不足なこいつにしたのかもしれない。この程度とは、堕ちたものだ。

「勝者、霞一夏。」

模擬戦は終了し、ピットに戻った。ISを解除し、そのまま、織斑先生&山田先生&箒のいる所に直行。観客席は、まだ興奮覚めやらぬ状態で、とても五月蠅かった。

「一夏！よく勝てたな。1年では、トップクラスの実力者らしいのに。」

「あれで、か。…、底が知れるぜ。」

「しかし、トップクラスの実力者をこうも簡単に倒すとはな。姉とし「俺に姉などいない。」…。」

「姉だど？何をふざけた事を。いい加減にしてくれ！！」

一夏はそう言って、MARZ東方支部に帰ってしまった。一夏が変わってしまったことに戸惑うと同時に、私の心のどこかで自分と一緒にだと、ほっとした。一体、この6年間で何があったというのだ、一夏。

番外編 Cradle（前書き）

そして人は揺り籠で空を飛び続ける、か。お前の答えだ。私はそれで良いさ。— A C f a セレン・ヘイズ —

番外編 Cradle

酷い話をしよう。少年は、ずっと揺り籠の中で育ってきた。否、籠の中で生きること強要されてきた。大切なものを、宝石箱に入れて、失わないように。傷つかないように。しかし、それでもいつか、揺り籠から出て自らの足で歩くときが来る。その時、手元に残るのは、少年が出て行った揺り籠と少年が出て行ったという事実だけだ。多分、その頃の俺は姉に、疑いを持っていたんだと思う。俺とIS、どっちが大切か。そして、姉と比べられることが、たまらなく嫌だった。何故、姉に出来て俺は出来ないのか。いつもいつも、その繰り返し。次第に、姉の存在が重くなっていた。世界最強、その称号を持つ姉が、たまらなく重く感じ始めたある日のこと。

「一夏、モンド・グロッソと一緒に行かないか？」

姉からの一本の電話。日本代表である姉は、第二回にも出場するらしい。まあ、姉のような化け物並みの身体能力保持者がそうういてたまるか。これは、チャンスだと思った。姉に、俺とIS、どちらが大事か問う為の。俺は、二つ返事で了承し、電話は切れた。ボストンバッグに荷物を詰め込み、荷造りを開始した。なんとなく、この家にはもう戻ってこないような気がした。思えばこの時、俺は無意識下で姉と決別するのを感じ取っていたかもしれない。

飛行機に乗り、ドイツに着いた。そのまま、ホテルに行き、先に部屋で待っていた姉と合流。モンド・グロッソの開会式にでた。

その後、外をぶらぶらしていたとき、公園で泣いている女の子を見つけた。ブランコに座って、泣いていた。ドイツ語なんて当時は分からなかったが、とりあえず近寄った。今思えば、馬鹿な行為だったと思う。大体、電子辞書片手にコミュニケーションしていたのだから。

「“どうして泣いているの？”」

「……………」

「ドイツ語分らないから、何かに書いてくれると嬉しいな。」
「…、“お父様に、役立たずって、言われたんだ。”」

辞書で意味を調べつつ、文をつっても単語をただ並べただけのものを書いていった。物凄い時間がかかったが、仕方なかった。女の子も待っていてくれたし、俺も待っていた。

“それなら、見返してやれば良いじゃん。自分は役立たずじゃないって、見返してやれば良いじゃん。”

「…、“しかし、私は…”」

「誰しも一発で出来るわけがない。だから、努力するんでしょ？」

「…“努力…”」

女の子は、もう泣いてなんかいなかった。瞳は腫れて充血していたが、そこには確かに光があった。

“有難う。礼を言う。私は”ラウラ・ボーでヴィツヒ“だ。”」

“どういたしまして。”イチカ・オリムラ“だよ。”」

これが、俺とラウラのファーストコンタクトだった。このときの俺達は、あんな形で再会するなんて思っていなかった。

そんなこんなで、決勝戦当日。姉が決勝戦まで勝ち残り、おれは姉の試合を見に行く為、ホテルを出た途端、羽交い絞めされ薬品を嗅がされた。気絶してしまつたらしい俺は、どこかの廃工場監禁されていた。ご丁寧に、ロープで逃げないようにしっかり固定されていた。暗くてよく分からないが、どうやら姉が目的だったらしい。それを聞いて、なんだか気が抜けた。結局、姉かよ。そんな思いが渦巻いて、ここで死ぬのもいいかなと思つたとき。

「レッツバーニングジャステイス!!!」

「う、うわあああああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！MARRZが来たぞおおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

MARRZ?聞いたことがある。対テロ対紛争の即時鎮圧組織。何故、俺を?ああ、姉の家族だからか。所詮そのぐらいしか、俺の存在価値なんて無いし。姉はISにお熱だし。アレ?俺っていないほうが

良いんじゃない？　とういか、いない方がむしろ好都合だったり…？
「別に、ここで殺してくれもいんだけどなー。ハァー、俺って何のために生かされてんだろうな？」

MARZの人がこっちに近づいてくるのが分かる。銃声とか悲鳴とか人を殴る音が、だんだん近づいてくるから。…でも、殴る音が聞こえるって、一体どんだけの力で殴ってんだ？　あり、えなくもないか。なんせ、世界に姉並みの身体能力保持者がいてもなんらおかしくもなんともない。

バンッ

「大丈夫か！？　レスキューに来た、ぞ！！」

「アンタ、誰？」

「俺は、「テメエエエエエ、死ぬエエエエエ！！」おっと、セイッッ！」

なんか、暑苦しい人が来て、誘拐犯がナイフ持って突撃かましたところに、カウンターでKOしていた。一瞬のことだったが、すごくカッコいいと思った。

「俺、一夏！　織斑一夏だ！　なあ、俺もアンタみたいになれるか！？」

「一夏、やはりその人達の…。イッシー・ハッター大佐だ。ハッターで良いぞ、一夏。」

その後、ハッターさんにロープを解いてもらっていると：

「一夏あああああああああ！！！！」

IS「暮桜」を展開した姉が来て、何を思ったのか雪片をハッターさんに振り下ろしやがった。俺は咄嗟に二人の間に割って入った。左肩から腕にかけて、激しい痛みが走った。が、突然痛みを感じなくなった。違和感を感じたが、その時はどうでも良かった。

「姉さん、俺、貴女のこと嫌いになりました。この人と一緒に行くので、さようなら。」

少年は揺り籠から出て、外で生きることを決めた。Cradre、それは揺り籠という名の箱庭。

番外編 Cradre (後書き)

後書き

ふう、や、やっと、終わったあゝ。

べ「よく、頑張ったな、うp主。」

に、人間やればできるもんだね。もう、やりたくないが。

霞「それは、今後のうp主の行動次第だな。今度やらかしたら、ナインボールⅡセラフとガチタンでやらせるぞ？」

な……、ナインボールはまずい。

べ「ファンタズマじゃないのか。」

霞「AMIDAでもいいが？」

(こいつら、本気だ。) 兎も角、番外編始まったねえ。

霞「元はうp主が忘れなければもっと早くに上がっていただろうが！」

そ、そうです。ごめんなさい。だから、何卒、シミュレーターだけはお勘弁!!

エ「…、いつも、こんな感じなのか？」

べ「ああ。それよりも、次予告頼む。」

エ「任せておけ。次回、一夏に束の間の休息が訪れた。クラスにだんだん馴染む一夏だが、女子が聞きたいことは山ほどあるようだ。

次回、第8話 休息 次なる… お楽しみに。」

第8話 休息 次なる…（前書き）

誤字修正12月26日

第8話 休息 次なる：

MARZ 東方支部にの自室に戻った俺は、脱がずにベッドにダイブした。コルタナはホログラムとして実体化し、ベッドの端に座っている。

「今更、姉貴面とは…。俺よりISを取りやがったくせに、何をぬけぬけど。いてほしいときに、いなかったくせに、偉そうにしやがって…。…。俺がどれだけ寂しかったか、辛かったか、知らない、くせ、に、…ッヒック。」

俺は枕に顔を埋め、泣いた。そんな俺の頭を、泣き止むまでコルタナは撫でていてくれた。思えば、泣いたのは久しぶりな気がする。多分、最後に泣いたのは、両親の最期のメッセージを聞いたとき以来だ。

一夏は、泣き疲れて眠ってしまったようね。今回、抑えてきたものが溢れてきて、どうしようもなかったんだわ。一夏って、上手く吐き出すことがなかなか、出来ない不器用な部類だから。だから、辛くなっても何も言わず、自分一人で抱え込んでるのよ。幼少期の家庭環境が、一番の原因なのでしょうけど。

「でも少しくらい、私に言ってくれても良いんじゃない？一夏、何のためのパートナーなのよ…。」

私にも背負わせてくれたって、良いんじゃない？そのための、パートナー、でしょ？

翌日、学校に行き、朝のSHRに山田先生が見事に爆弾を落としてくれやがった。ACシリーズのカクミサイル並みの威力だった。って、俺は何を言ってるんだ？

「クラス代表は、霞一夏君になります。1年1組霞一夏。あ、一繋がり縁起がよさそうですね。」

「は？俺は面倒が嫌いなんですけど…。何故に？」

「それは、私が推薦したからですわ。」

席を立ち、俺のほうに向かってくる馬鹿自慢女。昨日と豪く態度が、違わないか？あれ？俺だけ？

「私、貴方に敗れて初めて、自分の態度を反省しましたの。そして、分かりました。人として、まだまだ未熟だということが。貴方に対する数々の暴言、申し訳ありませんでした。」

「…、反省してるっばいし、謝罪の言葉も聴けたから、いいよな？皆？」

コクコくと、クラス中から許しの声がして、一件落着。って、

「何で、俺なんだぁー！！！！？」

「かすみんが、クラスで一番強いからだよ。」

「……、理由くらい、分かってはいたんだがな。」

机に、突っ伏す。理由は、大体想像はしていた。ここまで予想通りだと、誰が予想できたよ。まあ、こういう面倒事はMARZや白虹騎士団で慣れているから良いんだけどさ。

で、いつも通りの授業風景と休み時間は面白くも無いのでカット。件の織斑先生の授業ingグラウンド。ISを使っの飛行訓練らしい。先に、歩行訓練やった方がとか、思ったが他所のことに口出すのもあれなので、黙っておいた。

「霞、何故ISスーツを着ていない？」

「自分のISはスーツすらもISに登録してあるので必要ありません。」

と言っても、別にあるんだけどな。ただ、5月の初夏の気温にタレントトップとスパッツって、寒いだろう？女子は、知らんが。まあ、必要になったら、CISから引っ張り出すさ。

「次からは着てこい。」

「YES。」

「オルコット、霞、ISを展開しろ。」

「「はい。」」

イメージするは、戦場を疾駆する青い騎士。

「（来い、テムジン。）」

俺の体を中心に、0と1の光の帯が形成されていく。そして、徐々にテムジン707Jがリバース・コンバートされ、最後にテムジン最大の武装である、スライプナーが実体化する。リバース・コンバートが終了すると、0と1の光の帯が弾け飛ぶ。これが、IS「テムジン707J」の正式な展開の仕方だ。

「一夏、全システムクリア。エネルギー、チャージ完了。Vアーマ―、Vコンバーター、共に異常無し。いつでもどうぞ。」

「了解。しかし、リバース・コンバートはいつ見ても派手だな。」
「仕方ないわ。テムジンは、バーチャロン技術がふんだんに使われているのだから。」

「展開は出来たようだな。オルコット、霞、飛行してみろ。」

「はい。」

セシリア（そう呼べと言われた。）のブルーティアーズが先行し、俺も続く。すぐにシールド限界高度に到達。天井、低いな、ここ。言い換えればそれだけ、テムジン707Jが兵器として完成している、ってことなんだが。実験機が主戦力の学園じゃ、この程度が関の山か。

「おること、霞、急降下と急停止。目標は地上10cmだ。」

地上10cmか、どうしてなかなか無茶振りするかな。一歩間違えれば、地面とキスする羽目になるだろうに。

「一夏！！さっさと降りてこんかあ！！」

箒、叫ぶのはいいが、先生から物をぶんどるのは、正直、いかななものかと。仮にも教師だぞ。仮にも。山田先生、ガンバ。

「では、お先に。」

「おう。」

やはり、代表候補生。この程度は造作も無いか。…、面白くねえ。

「コルタナ、PIC解除。メインブースターの切ってください。」

「ハア、呆れた。怒られても知らないから。」

PICとメインブースターを切る。すなわち、墜落だ。本来なら、こんなことはしなくても問題は無いのだが、刺激が欲しかったので

やってみた。

「つよっと。コルタナ、スコアは？」

「9・97cmってところね。ブースターの起動が遅かったんじゃない？」

それから授業も進み、放課後になった。すかさず、即行で食堂に連行された訳だが：

「霞君のクラス代表就任、おめでとー！ー！！」

パーティーに参加、つか主役だった。それにしても、目の前のお菓子類、どっから仕入れてきたんだ？俺は、そっちの方が気になるんだが。

「はいはい！新聞部2年の黛薫子です。インタビューに来ましたー！」

「豪く、テンションの高い子ね。」

「おお！コルタナさんじゃないですか！？インタビューよろしい？」

「機密事項が沢山あるけど、それでも良いかしら？」

「うん。捏造のしがあるよ。後でコルタナさんに聞くとして、霞一夏くん。クラス代表への意気込みをどうぞ！」

ずいっと、ボイスレコーダーを向けられる。とういか、今、問題発言が聞こえたんだが。

「あー、ゴホン。俺は面倒が嫌いだが、言わせてもらおう。」

一旦言葉を切る。すると、騒がしかった食堂が一気に静まり返る。…、これ以外思いつかねえよ。

「俺の実力を証明してやる！！よく見ておくんだな！！……、こんなんでどうでしょう？」

「うーん！その自信満々な台詞に、痺れる憧れるう！」

大反響だったようだ。正直、引かれると思っていたのだがな。受け容れられたのなら、それで良いさ。

「次、コルタナさん。ズバリ、霞君との関係は？」

絶対、いつか聞かれると思ってた。色々と、公衆の面前で喋ってたからな。当然だわな。

「一夏のパートナーであり、友人であり、家族であり、恋人であり、守護霊でもある、ただの高性能AIよ。」

「一つ追加だ。俺にとって、何よりも優先される存在だ。な？」
「ええ。」

この場にいる、女子は確信した。自分達がどう頑張っても、二人の間には割り込むことは出来ない。

「……、そっか。告ぎ、セシリアさん。クラス代表を辞退した理由をどうぞ。」

「あー、コホン。何故、辞退したのかといいますと、…」

「ああ、やっぱりいいや。長そうだから、適当に捏造しておく。」

「え!?!ちよっ……!?!」

こんな奴が、いて良いのか。新聞部。

「セシリアさんと霞君の写真撮るからこっち向いてー。」

「ああ。」

「……、んじゃ撮るよ。35×51÷24は？」

「74・375」

「正解!」

パシャッ

結局、食堂にいた全員が写真に収まっていた。クラスの思い出、とか言っているが果たしてそうなのだろうか?ただ、写りたかっただけ、とかありそうだ。

少年は安堵し、少女は疑惑の淵に佇む。幸か不幸か、それに気づいた者はいない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8629y/>

IS～一夏の反抗～

2011年12月26日21時05分発行